

87 血漿交換が著効した全身性エリテマトーデス (SLE) に伴う粟粒結核関連血球貪食症候群の 1 例

和歌山県立医科大学血液浄化センター¹⁾、同第1内科²⁾角門真二¹⁾、椎崎和弘¹⁾、溝渕正英¹⁾、上村元洋¹⁾、織田ひかり¹⁾、崎久保悦男¹⁾、坂口俊文¹⁾、
根木茂雄¹⁾、秋澤忠男¹⁾、若崎久生²⁾

症例は34歳の男性。平成13年10月頃より多発性関節炎様症状出現。12月初旬より発熱(38～39℃)と肝機能障害を認めるようになり精査目的にて入院。入院後、抗核抗体陽性・抗ds-DNA抗体陽性・低補体価・リンパ球減少などによりSLEと診断された。12月19日よりプレドニゾロン(PSL)60mg/dayの、平成14年1月9日よりステロイドパルス療法、後療法として、PSL50mg/day及びシクロスポリン200mg/dayの投与を行った。これによりSLEの活動性は低下したものの汎血球減少を来とし、同時にフェリチン5889ng/ml、sIL-2R12800U/mlの著しい高値を認めたため、骨髄穿刺を施行したところ血球貪食像及び類上皮細胞性肉芽腫が、また胸部CTにて、多数のびまん性小結節影がみられ、粟粒結核関連血球貪食症候群と診断された。これに対し、抗結核療法及び血漿交換療法を2回施行したところ、汎血球減少とフェリチン、sIL-2Rの著しい改善を認めた。以上SLEに伴う粟粒結核関連血球貪食症候群に対して、血漿交換療法が著効を示した1例を報告する。

88 血漿交換を施行したIgE型多発性骨髄腫の一例

亀田総合病院 腎臓内科

小島智亜里、坂東美和、大石哲也、高橋元弘、望月隆弘

【症例】73歳、女性。腰痛、全身倦怠感にて近医受診し、血液検査で、腎不全を指摘され、当院紹介受診となった。入院時、胸腹水著明、BUN174mg/dl、Cr8.4mg/dlであり、経過、画像およびデータより急性腎不全と考えられた。入院後、直ちに血液透析を開始。その後の精査にてIgG、IgA、IgM低値、IgE異常高値(39万IU/ml)、血液・尿免疫電気泳動にてMタンパクIgE κ 型、Bence Jonesタンパクが同定され、骨髄生検にても形質細胞が9.5%を占め、IgE κ 型多発性骨髄腫と診断した。腎生検では、腎病変はparaprotein腎症と評価した。その間、全身状態は悪化し、化学療法(MP療法)を開始するとともに、Mタンパク除去目的に血漿交換(2重膜濾過法)を計3回施行した。炎症反応は改善し、また、IgE値も血漿交換1回目終了後には19万IU/ml、3回目には8万IU/mlまで低下し、治療は奏効したと思われる。しかし、その後、著明な骨髄抑制、肺炎を呈し、永眠された。

【考察】IgE型多発性骨髄腫は極めて稀な疾患である。腎不全を呈する症例は、非常に予後が悪いと報告されている。今回、化学療法と同時に血漿交換を行うことにより、炎症所見およびIgE値の改善が得られたので報告する。